

平成 30 年度 2 期研究・実験補助者雇用制度 利用者決定

平成 30 年度 2 期研究・実験補助者雇用制度の利用者は、16 名（女性 10 名、男性 6 名）の方に決まりました。

研究・実験補助者雇用制度とは育児又は介護のため、十分な研究・実験時間がとれない研究者に対し、研究又

は実験業務（注：教育関係の業務は支援対象外）を補助する者の雇用経費を負担するものです。募集は、年 2 回（6 月、12 月）です。本事業は、女性研究者に限らず、男性研究者も対象となります。また、研究分野の文系・理系は問いません。補助者未定でも申請できます。

伊藤公雄名誉教授が男女共同参画社会づくり功労者 内閣総理大臣表彰を受賞



本学の元男女共同参画推進室長の伊藤 公雄 滋賀県・京都府・大阪府男女共同参画審議会会長（京都大学名誉教授）が、平成 30 年度男女共同参画社会づくり功労者内閣総理大臣表彰を受賞されました。

この表彰は、多年にわたり男女共同参画社会に向けた気運の醸成等に功績のあった者や、各分野において実践的な活動を積み重ね、男女共同参画の推進に貢献してきた者などを顕彰することにより、豊かで活力ある男女共同参画社会の形成に資することを目的として、内閣総理大臣が表彰するもので、今年度は 10 名の方が表彰されました。

伊藤先生のコメント

『先日、「男女共同参画功労者内閣総理大臣表彰」を受けました。京都、大阪、滋賀の二府一県からの推薦ということで、大阪ではもう 30 年ほど、京都も 20 年くらい、滋賀県も合わせて 10 年、男女共同参画審議会（あ

るいはその前身の懇話会など）の委員として参加してきました。ここ数年は、この二府一県の審議会長をしてきたので表彰されたのではないかなと思慮される。（「この審議会の会長は女性にすべきだ」と言い続けてきたが、いろいろな理由で引き受けることになった）。最初は、受賞は遠慮しようと考えたが、日本のジェンダー状況がまったく改善していないこと、さらに、経済成長のための「女性の活用」にしかみえない政府の政策を前に、表彰なんてと考えてしまったのだ。とはいえ、わざわざ推薦してくれた方々のことを考えると、拒否というわけにもいかず、めでたさも中くらいというところで、今後のジェンダー政策への一里塚として受賞させていただいた。』

先生は男女共同参画事業に長年にわたり多大な功績があり、社会全体も認めたということだと思います。先生、本当におめでとうございます。

URL : <http://www.gender.go.jp/public/commendation/souri/meibo-h30.html>



第 13 回女子中高生のための関西科学塾

「女子中高生のための関西科学塾」は、関西の大学が中心となり女子中高生を対象に理科実験教室などを行う企画で、2006 年から開催しています。第 13 回目となる今回は京都大学を中心に神戸大学、大阪大学、大阪府立大学、大阪市立大学、奈良女子大学、株式会社クボタなどが参加し、開催されます。京都大学では 7 月 22 日（日）に「理系進路選択について」と題して田島 節子大

阪大学理学部長と平野 丈夫京都大学理学部長の対談が行われ、続いて 4 次元デジタル宇宙シアターと女性大学生との交流会があり、休憩をはさみ浅井 歩理学研究科准教授と理学研究科修士 2 回生の磯田 珠奈子さんの講演がありました。



無意識のバイアス Unconscious Bias をご存知ですか

こんな行動や考え方、心当たりはありませんか。

- ①女性は生まれつき数学の能力に欠ける、男性は育児が苦手である
- ②〇〇大学の出身者なら、この仕事を任せられる
- ③相手が話している最中に度々口を挟む、本人の前でその人を代弁する

男女共同参画学協会連絡会は、最近「無意識のバイアス — Unconscious Bias — を知っていますか？」というパンフレットを出しました。そこにはこんな紹介があります。

「無意識のバイアス — Unconscious Bias —」とは、誰もが持っているバイアス（偏見）のことです。育つ環境や所属する集団のなかで知らず知らずのうちに脳にきざみこまれ、既成概念、固定観念となっていきます。バイアスの対象は、男女、人種、貧富など様々ですが、自覚できないために自制することも難しいのです。無意識のバイアスは色々な判断をする過程において便利なショートカットの役割を果たします。特に、下記に事例として挙げたように、採用や昇進人事の場では、無意識のうちに「バイアス」が働き得ることが示されています。それでも、私たちは「無意識のバイアス」がいつ、どのように現れるかを知ること、で、「評価や判断」にあたってその影響を最小限に抑えることが可能です。

そこでは、3つのカテゴリーが紹介されています。

- その1. ステレオタイプ・スレット (Stereotype Threat)：先入観が脳に刻まれた結果、本人や周囲の考え方に影響を及ぼすこと。たとえば、「女子は生まれつき数学の能力に欠ける」という先入観が女性の進路選択に影響を及ぼすこと。
- その2. 属性に基づく無意識のバイアス：ジェンダー、職業、学歴等で人々を集団に分け、各集団の代表的な特徴（たとえば、〇〇に強い・弱い、信用できる・できない）を想定し、そこに属するメンバーの誰もがその特徴を持つと短絡的に判断してしまうこと。身内意識とよそ者意識も、これに含まれる。
- その3. マイクログレッション（些細な侮辱）：日常生活において、他人に対して横柄な態度をとること。たとえば、話の最中に度々口を挟む、目の前にいる人の存在を無視する、間違えた名前で呼ぶ等。本人に自覚がなく、対象となる人への無意識のバイアスの表れ。

無意識のバイアスは、誰もが持っているものですが、その存在を自覚することによって、弊害を抑えることも可能である、と締めくくられています。詳細は以下の URL をご確認ください。

「無意識のバイアス — Unconscious Bias — を知っていますか？」

男女共同参画学協会連絡会（2017）、

http://www.djrenrakukai.org/doc_pdf/2017/UnconsciousBias_leaflet.pdf

https://www.djrenrakukai.org/doc_pdf/2017/UnconsciousBias_leaflet_eng.pdf

無意識のバイアスに関する左記のパンフレットには、具体例として、以下のような実証研究も紹介されています。

Motherhood Penalty? (母親であるゆえのペナルティ?)

能力的にも学歴も職歴も全く同じレベルで、子供の有無だけが違う管理職候補者の評価をした際、父親の方が母親より有能とみなされ、初任給の額も高い。子供のいない女性は父親あるいは子供の無い男性と同レベルかそれ以上の評価を得る傾向にあり、推薦される割合も母親の2倍近い。

女性だからというわけではなく、「母親だから」とみなす「無意識のバイアス」があることを示しています。なお、評価結果に評価者のジェンダーによる違いはみられませんでした。

S. J. Correll, et al. (2007) Am J. Sociology, 112, 1297-1339.

選ぶ側に女性がいなければ、女性を選ばれにくい

これは日本の例です。理工系学会の中でも比較的女性割合の高いライフサイエンス系7学会 Visibility 調査からわかってきたことです。

年会のワークショップやシンポジウムの招待講演者の女性割合とオーガナイザーの女性割合を調べたところ、オーガナイザーが全員男性の場合、女性講演者の割合は10%であったが、オーガナイザーに女性が入った場合、32%に上がったのです。この32%という値は、学会の女性会員割合にほぼ匹敵します。選ぶ側に女性がいなければ、女性を選ばれにくいという典型例のひとつです（図略）。

M. K. Homma, et al. (2013) Genes to Cells, 18, 529-532.

教授の推薦状には男女で違いがある!?

指導教授が書く女性候補者への推薦状は男性候補者への推薦状と比べて短く、男性候補者の推薦状には「ずば抜けて優れている (Outstanding)」、「非常に優れている (Excellent)」という優秀さを表す言葉が頻用されるが、女性候補者には「細心」、「よく働く (Hard-working)」等の態度を表す言葉が多い、といった事例が挙げられています。

“よく気がついて協力的” という「女性の役割に対する既成概念」が「無意識のバイアス」となって推薦状の内容に反映されたものでしょう。

F. Trix and C. Psenka (2003) Discourse & Society, 12, 191-220.

なんとなく意識しないで過ごしている中で多くの「無意識のバイアス」があるという認識だけでも大事ですが、パンフレットでは、次のような時は影響が出やすいため、留意が必要と指摘されています。

- ・疲れている時、判断を急いでいるとき、色々な情報で脳がオーバーロードの状態にあるとき
- ・候補者の中の女性割合が大変低いとき
- ・業績に関する正確な、あるいは妥当な情報が不十分なとき
- ・評価基準があいまいで、紛らわしいとき

連載：研究者になる！－第66回－

農学研究科・准教授 山根 久代

●周りの影響と消去法で決めた農学部進学

「果樹の研究をしているの!」「よく喋るようになったね!」。島根にいた頃の同窓会に行くと、現在の私によく驚かれる。農学といっても祖父が趣味で畑を作っていただけで、実家が農家というわけでもない。また、人と積極的に関わるタイプでもなく、なんとなく植物が好きで地道に何かに打ち込んでいる。そんな子どもだったから、自分は間違いなく文系より理系。でも人の命を預かる仕事は怖い。そんな私が、自分に向いていることで人の役に立つには……。そう考えたときに、出した答えが農学部への進学でした。

私の地元には高校が一つしかなく、大学を目指す人は文系・理系問わずそちらの理数科に進学するという環境でした。そのため、クラスに女子はそれなりにいましたが、理系大学を目指していたのは二人だけ。私自身、特に志望校はありませんでしたが、2・3年時の担任の先生が熱心に偏差値の高い学校を勧めてくださったこと、そして周囲の志の高い生徒につられる形で京大を受験しました。今思えば、私の人生はその時の担任の先生が形作ってくださったのかもしれません。



●「面白いこと」に打ち込んだ学生時代

大学に入学してからは真面目に学業に専念しました。と、言いたいところですが、実は学生の特権!とばかりに、それまで縁のなかったアーチェリーに打ち込んでいました。「アーチェリーは大学に入ってから始める人が多いから、頑張ればインカレに出られるかも」という言葉に誘われての入部でした。波は激しかったですが、実際にインカレに出場し、関西の新人戦で2位という成績を残せたのは自分でもびっくり。研究に没頭し始めたのは、4回生の春に部活を引退してからでしょうか。

その頃の農学部は、今とは違う細分化された学科体制で、研究室も作物別に分かれていました。私が入ったのは作物生産を研究する農学科。それぞれの先生が稲・野菜・果樹と、専門の作物を詳しく教えてくださり、学生実験では実際に対象作物に触れて育てて研究していました。当時は見聞きするものがすべて楽しくて仕方



なく特に果樹園芸は育てる環境が身近になかった分、より魅力的に感じ、私のやりたかったことはこれだ!と自分に合っていると確信しました。

研究者になることは悩みましたが、結局決断した理由も、修士の時に与えられたテーマが先端的で面白かったから。毎日遅くまで残って実験を繰り返し、学会で発表すると皆さん熱心に聞いてくださるので、「もう少し頑張ればもっと興味を持ってもらえるかな」のその繰り返しでどんどん研究にのめり込んでいきました。



●女性研究者としての損得は半々。自分らしい道を進んで

現在は、10年前から行っている植物の休眠現象の解明に加え、消費者をターゲットにした、より美味しいブルーベリーとライチを作るための研究も行っています。果樹を相手の研究は、きちんと育てるところから始めなければいけない上、結実するその時に何らかのデータを得なければ、また1年後を待たなければいけない。そういった意味では、論文の本数で研究の進展を測られると厳しいものがあります。また、他分野の女性の先生方も同じだと思いますが、子育てをしていると時間の壁にぶつかることが多々あります。現在は「自分がやることをやる」と割り切っていますが、研究を主としたい女性研究者の場合、講義の量をオフィシャルに減らすなどの対策があってもいいのかもしれません。とはいえ、研究助成制度のなかには女性研究者向けのものがあっても思うので、結局、研究者の性別によるメリット・デメリットは半々でしょうか。楽天的かもしれませんが私はそのように考えます。最近は「ノケジョ（農学系女子）」という言葉が巷で囁かれるように、農学の道に進む女子は増えてきています。自分の価値観を大切に個性を生かし、周りに惑わされず、どんどん目指す道を進んでもらえたらと思います。

編集後記

虫干し中!! センターには3台のお散歩カートがあります。保育室〜ゆりかご〜の待機乳児用のお散歩カートです。天気の良い日には虫干ししていつでも使えるようにしています。



Gender Equality Promotion Center

〒606-8303 京都市左京区吉田橋町
電話 075 (753) 2437
FAX 075 (753) 2436
E-mail w-shien@mail2.adm.kyoto-u.ac.jp
HP <http://www.cwr.kyoto-u.ac.jp/>